

加奈の笑顔

山村 道子（祖母）

加奈が生まれたとき、娘は生活のため仕事があり、生後半月から加奈を預かりました。娘が仕事の時は、おくるみにくるまれた赤ちゃんが私の所へ来ました。小さな頃は、何をしても可愛くて、今でも一つ一つのことを忘れないで覚えていきます。少し大きくなって保育園へ通うようになり、送り迎えは私の仕事でした。私自身も仕事を持ち、なかなか時間も生活も楽ではありませんでしたが、毎日の生活を孫たち（特に小さな加奈）のまるで仏様のような笑顔にどんなに癒され、励まされてきたかと思うと悲しくて、悔しくて、私自身生きていく気力がなくなってしまいました。

加奈は私たち家族にとって太陽のような存在でした。お姉ちゃん達にも可愛がられ、お姉ちゃんやお兄ちゃんのお友達にも可愛がられて、いつも加奈が中心にいて、いつも優しい笑顔で笑っていました。毎日、楽しそうな加奈を思い出します。でも、もうあの笑顔を見ることはできません。

その日、私は、訪問ヘルパーの仕事で、二時少し前に家を出ました。この年の四月から一年生になった加奈を、私と娘が交代で、朝は自転車を引き、送り、帰りは迎えに出るという日々で、その日はお母さんのお迎えの日でしたが、二時半頃、私の携帯が鳴り、娘の

「加奈が事故。今、救急車。意識が無い。」

と、悲痛な声で、訴えてきました。

私は、ある程度の仕事を片付け、こども病院へ急ぎました。その時、えらく時間が長く感じられたのは、わたしだけだったのでしょうか？病院に着くと、娘と担任の先生と二人、救命室の前で、落ち着かない様子に、私は声も出ませんでした。

「加奈は？」

と聞くと、

「今、生命維持装置で何とかもっている。」

とのことでした。私は、その時、何が起きているのか理解できず、声も涙も出ませんでした。その内、私の息子夫婦たちも駆けつけ、しばらく待たされました。一時間程して、病院の先生から、

「これ以上は、加奈ちゃんの身体を傷つけるだけなので、生命維持できないので声を掛けてあげてください。」

と言われ、加奈の元へ導かれました。「加奈。加奈。」皆が呼びましたが、加奈はまだ眠っているだけで、きっと気がついて、元気になると思いたい私たちに、答えてはくれませんでした。

「加奈が死んじゃった。」

兄弟たちもいったい何が起きたのか分からず、泣いているのは、担任の先生だけでした。病院の医師に、

「加奈ちゃんを、どうされますか？」

と聞かれ、

「連れて帰ります。」

と答えたのを、今でもはっきり覚えています。

どうして加奈が事故にあったのか、聞いたのはそれからです。加奈は学校の通学路を一人で歩いて帰ってくる途中、幅三メートル位の交差点で、右折してきた車に頭を轢かれ、そのまま少し轢きずられ、近くにいた短大生の方が、車の窓を叩いて、車を停めたようでした。娘が待っていた所は、一〇〇メートルもないところですが、道がカーブしていて、娘は学校からの連絡で駆けつけました。加奈は救急車に乗せられるところで、きつとお母さんが来るのを待っていたのでしょう。そのことを聞いてから、私は涙が止まりませんでした。どんなに痛かったか、恐ろしかったかと思うと、その時の加奈の恐怖を思うと、何日も眠れぬ夜と、あふれた涙は止められませんでした。

当日、加害者の父親と奥さんが来て、頭を下げていきましたが、私たちは、何とも答えることはできませんでした。翌日、事故現場へ行ってみると、学校のお友達や保育園のお友達が、現場に花やお菓子、またお手紙などを山のように置いてくださって、また涙が止まりませんでした。

通夜と葬儀は自治会の方をお願いして、集会所で行いました。集会所なら小さな子どもでも歩いて来られるから、加奈に会いに来てもらいたかったのです。思った以上の人が来てくださり、加奈と仲の良かった子どもたちも最後の『さよなら』を言うてもらいました。小さな棺桶に入った加奈が焼かれて骨になった時、娘は気を失いそうになってしまいました。

ここで、兄や姉と妹について少し書かせていただきます。今まだ、加奈の話ができない姉や兄がいて、加奈の死を受け入

られない一番下の妹がいます。一番下の妹は一歳で、通夜も葬儀とも人に預けていましたが、家へ帰ってから、加奈がないことに気付いて、いつ帰って来るのかという顔をしていました。加奈と同年の子どもを見ると、必ず顔を覗き込み、『抱っこして』のポーズをします。玄関で音がする度、「加奈ちゃんだ。」と、飛んで行くのですが、寂しい顔をして戻ってきます。一番可愛がってくれたお姉ちゃんでした。毎夜、絵本を読み聞かせ、寝かしつけてくれたお姉ちゃんは、もういないことは、その内、記憶の中からも無くなっていくのかと思うと悲しいです。

しばらくして私たちは警察へ行き、「何故、加奈が事故に遭ったのか？ 加奈の方に悪いところがあつたのか？」と聞きに行きました。担当の交通課の警察官の方は、加奈は、もう道路を渡り終えようとしていたので、大人の足では、あと一歩のところでしたよと、加奈に非はないと言われました。その時、事故当時、加奈が着ていたものやランドセル、横断バックに入った水筒などが返されました。ランドセルは、三月頃買ったもので、まだピカピカでしたが、裏は血に染まっています。靴も血だらけでした。私たちは本当に悔しい思いで、それらを持ち帰り、まだしまうことができず、加奈の部屋においてあります。

そんな頃、支援センターのことを知り、相談に伺うようになりました。また、加害者は任意保険にも入っておらず、自賠責保険も私たちに請求することになり、弁護士さんもあちこち問い合わせ、何度も足を運び、刑事裁判から引き受けてくださる弁護士さんをお願いしました。でも、それから随分時間がかかり、警察も検事さんも、弁護士さんも何も言っていない日々が続く、また、加奈のランドセルや事故当時の物を、「もう一度、捜査したい。」と取りに来ましたが、それから私たち

は、長い時間を待ちました。他の交通事故の裁判が終わったことを、テレビのニュースなどで知ると、加奈の裁判は忘れられているのかと思う日々でした。そんな中、加奈が通っていた西奈小学校は、ヘルメット通学が決まり、小さな一年生が白いヘルメットをかぶって通学しているのを見ます。あの子どもたちの中に加奈はいないけど、加奈の事故が見直され、ヘルメットで小さな命が守られるよう、心から願ってやみません。

二十四年十一月十九日、一回目の公判が始まりました。被害者参加で娘も証人として立ちますが、一回目は加害者が無罪を主張してきました。二回目は、警察官と目撃者の証人尋問がありました。目撃者の方は、相手の弁護士に酷い言われ方をされて、申し訳なく思いました。三回目は、鑑定人の証人尋問があり、加奈に落ち度がないことを主張してくださいました。四回目は、娘が証人尋問に立ちました。娘が待っていた所や、加奈がどんな子だったかを聞かれました。五回目、六回目と続き、平成二十五年五月二十七日、判決が出ました。加害者は、禁固二年六ヶ月（執行猶予五年）。求刑禁固二年六ヶ月を下されました。私たちは実刑を求めたのですが、執行猶予の五年は一番長いそうです。これで加奈の悔しい思い、私たちの思いは、少し晴れたのかなと思います。

今、考えると、長い時間を掛けて検事さんや警察の方々が、鑑定人まで頼んでくださり、本当にありがたく思っております。また、色々な人にお世話になりました。

交通事故は、被害者も加害者も、残された人生は地獄のような辛い生活が待っています。今、この手紙を書いている私自身、まだまだ加奈のことを思い出すのは辛いです。加害者もその時のことを忘れることはないでしょう。加奈は随分前です

が、私（祖母）に、夢で『さよなら』を言いに来てくれました。私が「どこへ行くの？」と聞くと、お母さんが待っているからと言って、行ってしまいました。今度生まれ変わったら長生きしてね、と心から願っています。いつまでも、加奈の笑顔は忘れません。

加奈のあの仏様のような、優しい笑顔を返してください。

今でも、私と娘が交代で迎えに出たあの場所に、ピンクのランドセルを背負った加奈が、汗を掻きながら『ただいま。』と帰って来るような気がしてなりません。私たちはいつも事故現場のすぐ傍のところに迎えに出ていましたが、今でもどうしてもそこに加奈がいるような気がして、目を離せないことが悲しいです。いつもお腹を空かせて帰って来た加奈です。きつとあの時も、お腹を空かせていたことでしょう。加奈の大好きな物をいっぱい並べても、加奈はもう食えることができないんです。

今、この日本にいる全ての運転手さんと加害者に、私はお願いしたいことがあります。小さな子どもを見たら、決して見落とさないよう、心にもう一つの目を持って見てください。また、事故を起こしてしまったら、素直に謝ってください。心から謝ってください。幼い子どもが巻き込まれる事故が、少しでも多く減ってくれることを心から願います。加奈の尊い命が奪われたことを無駄にしないためにも、私たち家族は、交通事故殺人が減ってくれることを願っています。